研　　究

発達障害児の小学校普通学級適応状況の考察

―発達指数および障害児受容環境の観点から―

岩永竜一郎[1)*1]，小田みちえ[2)*2]
川崎　千里[3)*3]，土田　玲子[4)*1]

〔論文要旨〕

就学前に精神発達遅滞，広汎性発達障害，注意欠陥多動障害等の診断を受けた小学校普通クラスに在籍する71名について，彼らの学校での適応状況と，学校構成員の障害児受容，遠城寺式乳幼児分析的発達検査の発達指数（以下，発達指数）がどのような関係にあるかを検討した。その結果，学習面では，学校構成員の障害児受容とは相関がみられず，遠城寺式検査の発語，言語理解と有意に相関していた。それに対して学校に喜んで行くことや他児との関係の程度については，発達指数とは相関が認められず，学校側の理解，他児の受け入れ等の学校構成員の障害児受容と相関していた。本研究では発達障害児の小学校普通クラスでの適応において，児の能力のみでなく，学校構成員の障害児受容についても重視する必要性が示唆された。

Key words：発達障害児，学齢期，適応，学校構成員の障害児受容，発達指数

Ⅰ．はじめに

近年，学校・学級の選択において保護者の意見が尊重されることが増えていることもあり[1)]，発達障害児が普通クラスに就学するケースが増えている。そして，その中で彼らの学校における適応は大きな課題となっている。発達障害児の学校での学習面，対人面，行動面，情緒面などにおける適応は，子ども自身の障害の程度，発達レベルや学校での子どもを取り巻く学校構成員の障害児受容に左右されると考えられる。

長崎県立心身障害児療育指導センターは就学前児の療育・指導施設であり，精神発達遅滞（MR）児，広汎性発達障害（PDD）児，注意欠陥多動障害（ADHD）児等の発達障害児の療育・指導の中で就学に向けての指導も行っている。当センター療育終了児を調査すると56.2％は小学校で普通クラスに在籍しており，この中には専門家から特殊クラスへの就学を勧められたにもかかわらず保護者の希望によって普通クラスへ就学したケースも含まれている。そのためそれらの子どもが普通クラスにおいて適応できているのか，適応の要因は何か調査する必要がある。そこで当センター卒園児の適応状況，社会的環境要因につき保護者にアンケート調査を実施した。そして，アンケートの結果と就学前における遠城寺式乳幼児分析的発達検査（以下，遠城寺式検査）[2)]の下位領域発達指数との関係を明確にし，発達障害児の普通クラスでの適応

Assessment for Adjustment to Common Elementary School Including by Children with Developmental Disabilities.
[0039]
受付 98. 7.17
採用 99. 3.15
Ryoichiro IWANAGA, Michie ODA, Chisato KAWASAKI, Reiko TSUCHIDA
1）茨城県立医療大学　2）長崎県立心身障害児療育指導センター
3）佐世保市こども発達センター　4）長崎大学医療技術短期大学部
（＊1 作業療法士，＊2 言語療法士，＊3 小児科医師）
別刷請求先：岩永竜一郎　茨城県立医療大学　〒300-0331 茨城県稲敷郡阿見町阿見4669-2
Tel 0298-40-2208　Fax 0298-40-2308

要因について検討した。

なお，この調査は著者らが長崎県立心身障害児療育指導センターに在籍中に行ったものである。

Ⅱ．対　　象

過去に当センターに通所し，就学と同時に療育を終了した児の保護者にアンケート調査を行い，287名の中，190名から回答を得た（回答率：66.2%）。その回答で現在小学校２～６年の普通学級に在籍する71名を対象とした（**表１**）。対象児の当センター通所時の診断は，MR(30名)，ADHD(18名)，自閉性障害(14名)，発達性言語障害(４名)，発達性構音障害(２名)，発達性協調運動障害(３名)であった。アンケートに回答した保護者は，全て母親であった。

Ⅲ．方　　法

1．アンケート調査

保護者にアンケート用紙を送付し，記入後返送してもらった。アンケートの内容は下記の（Ⅰ）学校での適応に関すること４項目，（Ⅱ）学校構成員の障害児受容に関すること３項目の計７項目で，**表２**のように各項目で３～６段階の回答を求めた。

（Ⅰ）学校での適応に関すること

1）学習面は上手くいっているか

2）子どもは学校に喜んで行っているか

3）他児との関係は上手くいっているか

4）落ちついて授業に参加しているか

（Ⅱ）学校構成員の障害児受容に関すること

5）学校側の子どもの受け入れの程度

6）学校側の子どもに対する理解の程度

7）他の子どもの受け入れの程度

学習面については読み，書字，聞き取り，算数の中で問題がある数をそのスコアとした。その他のアンケート結果は，**表２**の項目毎の回答の番号をスコアとした。従ってスコアが高いほど問題が大きいと言える。

2．幼児期の遠城寺式発達検査

これは，心理判定員が直接対象児を観察し行った。スコアは対象児の検査時年齢が異なるため，便宜上各領域ごとに発達指数に換算した。遠城寺式検査は乳幼児の発達検査法として広く利用されてきており，６つの発達領域毎に発達年齢を算出し子どもの発達の特性をとらえることができる。この検査は1958年に初版が出されたが，1997年の宅見ら[3]の研究でもその有用性が確認されている。

3．アンケート結果と発達検査スコアの相関分析

（Ⅰ）の1)，2)，3)，4）の項目間毎，（Ⅰ）の1)，2)，3)，4)と（Ⅱ）の5)，6)，7）の項目および，遠城寺式の各領域の発達指数との相関をSpearmanの順位相関を用いて分析し，発達障害児の小学校普通クラスにおける適応に関する要因を検討した。

Ⅳ．結　　果

1．アンケート結果

学校での適応に関する４項目のアンケート結果を**表３～６**に示した。「学習は上手くいっているかの」設問では問題がない子どもは21%の

表１　対象児の幼児期の診断，調査時の学年

診　　断	人　員	学　　年				
		２年	３年	４年	５年	６年
精神発達遅滞	30	6	7	8	2	7
注意欠陥多動障害	18	6	4	2	2	4
自閉性障害	14	3	5	3	3	0
発達性言語障害	4	0	0	1	3	0
発達性構音障害	2	1	0	0	1	0
発達性協調運動障害	3	1	1	0	0	1

表2　アンケートの調査内容

子どもの学校における適応状況について
① 学習面は上手くいっていますか
通知表で評価が不良のもの，または極端に落ち込んでいるものを問題があるものと判断して下さい。
1. 全く問題ない　2. 読みの能力に問題がある　3. 書字能力に問題がある
4. 聞き取りに問題がある　5. 算数・数学に問題がある
② お子さんは現在喜んで学校に通っていますか
1. 喜んで行っている　2. まあまあ喜んで行っている　3. どちらともいえない
4. 少し嫌がっている　5. 嫌がっている
③ 他の子どもとの対人関係は上手くいっていますか
1. 良い関係がとれている　2. まあまあ良い関係がとれている
3. 他の子どもが協力すると関係がとれる　4. とちらとも言えない
5. あまり関係がとれていない　6. 全く関係がとれない
④ 授業は落ちついて受けていますか
1. 落ちついている　2. やや落ちつきにかける・ときどき立って回ることがある
3. 非常に落ちつかない・着席は5分もできない

学校構成員の子どもの受け入れについて
⑤ 学校側の受け入れはどうですか
1. 受け入れに積極的　2. 受け入れに積極的でも消極的でもない
3. 受け入れに消極的　4. 受け入れに拒否的
⑥ お子さんに対する学校側の理解はどうですか
1. 十分理解してもらっている　2. まあまあ理解してもらっている
3. どちらともいえない　4. あまり理解してもらえない　5. 全く理解してもらえない
⑦ お子さんに対する他の子どもの受け入れはどうですか
1. よく受け入れてくれている　2. まあまあ受け入れてくれている
3. どちらともいえない　4. あまり受け入れてくれていない
5. 全く受け入れてくれていない　6. 受け入れに拒否的またはいじめられている

みであった（**表3**）。「喜んで学校に行っているか」の設問では持続的な登校拒否は見られず約8割が，喜んでまたはまあまあ喜んで学校に通っているとの回答であった（**表4**）。「他の子どもとの対人関係」についての設問では，86％に何らかの関わりがあることが回答されており，全く関係がとれていないという回答はなかった（**表5**）。「落ち着いて授業に参加しているか」についての設問では45％がやや落ち着かないという回答であったが非常に落ち着かないという回答はなかった（**表6**）。

学校構成員の障害児受容に関する3項目のアンケート結果は**表7～9**に示した。「学校側の受け入れ」では拒否的との回答はなかったが，積極的と回答したのは34％のみであった（**表7**）。「子どもに対する学校側の理解」では84％が何らかの理解を得ているとの回答であった（**表8**）。「他の子どもの受け入れ」は約8割が受け入れてもらっていると回答したが，いじめにあっているとの回答が2件あった（**表9**）。

2. 幼児期の遠城寺式検査の結果

遠城寺式検査(45～75か月時)の発達指数の平均値は，粗大運動78.5±14.9，手の運動76.2±12.5，基本的生活習慣81.1±14.3，対人関係68.6±16.9，発語63.5±19，言語理解66.1±19.7であった。

3. アンケート結果と遠城寺式検査の相関

Spearmanの相関を用いた分析により，適応の各条件毎に次の結果を得た（**表10，表11**）。

1)「学習面は上手くいっているか」について

この質問では，(Ⅰ)-4)「落ち着いて授業に参加しているか」と相関($r=0.293$，$p<0.05$)が認められた。学校構成員の障害児受容についての項目とは相関が認められず，遠城寺式検査

表3 (Ⅰ)-1) 学習は上手く行っているか

回答	人数	%
問題なし	15	21
1つに問題あり	19	27
2つに問題あり	7	10
3つに問題あり	2	3
全てに問題あり	28	39

表4 (Ⅰ)-2) 喜んで学校に行っているか

回答	人数	%
喜んでいっている	36	51
まあまあ喜んで行っている	19	27
どちらともいえない	13	18
少し嫌がっている	3	4
嫌がっている	0	0

表5 (Ⅰ)-3) 他の子どもとの関係は上手くいっているか

回答	人数	%
良い関係がとれている	12	17
まあまあ良い関係がとれている	39	55
他の子どもが協力するととれる	10	14
どちらともいえない	9	13
あまり関係がとれていない	1	1
全く関係がとれない	0	0

表6 (Ⅰ)-4) 授業中の落ちつき

回答	人数	%
落ち着いている	37	52
やや落ちつきにかける	32	45
非常に落ち着かない	0	0
無回答	2	3

の発語($r=-0.368$, $p<0.01$), 言語理解($r=-0.267$, $p<0.05$)とに有意な相関が認められた。

表7 (Ⅱ)-5) 学校側の受け入れ

回答	人数	%
受け入れに積極的	24	34
積極的でも消極的でもない	38	54
受け入れに消極的	1	1
受け入れに拒否的	0	0
その他	6	8
無回答	2	3

表8 (Ⅱ)-6) 子どもに対する学校側の理解

回答	人数	%
十分理解してもらっている	21	30
まあまあ理解してもらっている	38	54
どちらとも言えない	7	10
あまり理解してもらっていない	2	3
全く理解してもらえない	0	0
無回答	3	4

表9 (Ⅱ)-7) 他の子どもの受け入れ

回答	人数	%
よく受け入れてくれている	21	30
まあまあ受け入れてくれている	35	49
どちらともいえない	11	15
あまり受け入れてくれない	1	1
全く受け入れてくれない	0	0
受け入れに拒否的	0	0
いじめられているようだ	2	3
無回答	1	1

2)「子どもが喜んで学校に行っているか」について

この質問では, (Ⅱ)-6) 「学校側の子どもの理解」($r=0.391$, $p<0.01$), (Ⅱ)-7)「他の子どもの受け入れ」($r=0.481$, $p<0.001$)との間に有意な相関が認められた。また, (Ⅰ)-3) 「他の子どもとの関係は上手くいっているか」とも有意な($r=0.508$, $p<0.001$)相関が認められた。その他の学習面や遠城寺式検査の発達指数とは有意な相関は認められなかった。

表10　学校での適応状況間の相関：Spearmanの順位相関による相関係数

	適応状況			
	Ⅰ-1)	Ⅰ-2)	Ⅰ-3)	Ⅰ-4)
Ⅰ-1)　学習面は上手くいっているか				
Ⅰ-2)　学校に喜んで行っているか	0.182			
Ⅰ-3)　他児との関係は上手くいっているか	0.04	0.508***		
Ⅰ-4)　落ち着いて授業に参加しているか	0.293*	0.074	0.1	

*：$p<0.05$，**：$p<0.01$，：***$p<0.001$

表11　学校での適応状況と学校構成員の受容および遠城寺式発達検査の関係：Spearmanの順位相関による相関係数

	学校構成員の受容			遠城寺式乳幼児分析発達検査					
	学校の受け入れ	学校の理解	他児の受け入れ	移動運動	手の運動	基本的生活習慣	対人関係	発語	言語理解
学習面は上手く行っているか	0.068	-0.022	-0.053	-0.053	-0.121	-0.018	0.019	-0.368**	-0.267*
学校に喜んで行っているか	0.216	0.391**	0.481***	-0.057	-0.021	0.141	0.131	0.126	0.103
他児との関係は上手くいっているか	0.313*	0.448***	0.740***	-0.69	-0.001	0.072	0.028	0.091	0.016
落ち着いて授業に参加しているか	0.084	0.182	0.094	-0.04	-0.014	-0.113	0.053	0.113	-0.019

*：$p<0.05$，**：$p<0.01$，：***$p<0.001$

3)「他の子どもとの関係は上手くいっているか」について

この質問では（Ⅱ）-5）「学校側の子どもの受け入れ」（$r=0.313$，$p<0.05$），（Ⅱ）-6）「学校側の子どもの理解」（$r=0.448$，$p<0.001$），（Ⅱ）-7）「他の子どもの受け入れ」（$r=0.74$，$p<0.001$），との間に有意な相関が認められた。そして，対人関係や言語等の発達指数とは相関が認められなかった。

4)「落ちついて授業に参加できているか」について

「落ちついて授業に参加できているか」の調査では遠城寺式発達検査の全ての領域及び，学校構成員の障害児受容についての設問双方ともに相関が見られなかった。

Ⅳ．考　　察

本邦では，学習障害児，PDD児，MR児などの発達障害児が普通クラスで教育を受けることが多い[4)5)]。これはノーマライゼーションの理念に基づいた統合教育によることもあるが，特殊教育をできる学校，学級が地域にないなどのやむを得ない理由や保護者の希望などによることも多い[1)]。また，本邦における特殊教育の比率が低い[6)]ために特別なサービスを必要とするにもかかわらずそれを受けられない発達障害児がいる可能性もある。このような問題が今回調査した対象にも反映されている可能性はあり，この現状における適応状況を把握する必要があると考えられた。一般に学校での適応は学習面で評価されることが多いが，社会適応の観点からみると，子どもが喜んで学校に行くか，他の子どもとよく遊べるか，落ち着いて授業に参加できるかなどの面も重要であると思われた。そのため本研究では学習以外の適応についても調査を行った。

本研究の調査では約8割に学習面の問題がみられ，発達障害児の多くは学習面で障害を示す

ことが示唆された。そして，学習面の達成度は，幼児期の言語能力と関係する可能性が示唆され，遠城寺式検査の言語領域の発達によりある程度予測できるものと考えられた。原ら[7]は就学前の検査結果からLDを予測できたことを報告しており，今回の結果からも同様のことが言える。また，学習面の達成度と授業中の落ちつきの相関が見られたが，その他の学校構成員の障害児受容に関する設問とは相関が見られず，学習達成度は環境的要因より子ども自身の能力に左右される可能性が示唆された。

「子どもが喜んで学校に行くか」の設問は，登校拒否との関連が強いと考えられるので，学校への適応において最重視すべき点と考えられたが，本研究では8割の子どもが喜んで（まあまあ喜んでも含む）学校に行っており，学習面の問題が多いのとは対照的であった。そして，子どもが喜んで学校に行くことと学習は上手くいっているかの結果との相関はみられなかったことから，登校意欲は必ずしも学習達成度と関係するとは言えないことが推察された。「喜んで学校に行くか」の設問の結果は遠城寺式検査の結果とは相関が認められず，幼児期の発達検査の結果のみでは十分予測できないと考えられた。また子どもが学校に喜んで行くためには，学習能力や発達検査で評価される言語・対人関係能力など子ども自身の能力よりも，学校構成員の障害児受容の方が重要であることが推察された。一般の小学生が学校に行く動機としてあげたものに「友達に会えること」が最も多かったことが報告されており[8]，発達障害児においても学校で友達から仲間として受け入れられ，交流することによって学校に通う意欲が強まるものと推察された。

他の子どもとの関係については多くの子どもが何らかの形で対人関係を持つことができており，この点からは統合教育の意義が示されていると考えられた。またこれは遠城寺式検査のスコアと相関が見られなかった一方で，学校側の受け入れ及び理解，他児の受け入れと相関が認められ，子ども自身の対人関係能力の発達の程度より周囲の理解，受け入れが重要であることが示唆された。

以上のように発達障害児の学校での適応状態を学習以外の側面についても検討してみると，言語・対人関係能力や学習能力など子ども自身の能力のみでなく，学校側の理解，他の子どもの受け入れなど，学校構成員の障害児受容についても重視する必要性が示唆された。このことから，就学前指導において，子ども自身の能力の発達促進のみならず子どもを取りまく環境改善への働きかけも重要であると考えられた。

今回の調査から得た情報は保護者のアンケートによるものであるため判定基準に差がある可能性があり，解釈には十分な注意を要する。また，対象児がMR児，注意欠陥多動障害児，自閉性障害児などに偏っていた点があるため，今後その他の発達障害児についても学校での適応に関係する要因について検討する必要がある。

文　献

1) 宮崎直男．軽度発達障害児の現状と課題．発達の遅れと教育　1997；475：6-9.
2) 遠城寺宗徳，他．遠城寺式乳幼児分析的発達検査法．東京：慶應通信，1977.
3) 宅見晃子，八木隆三郎，今村淳子，高岸由香，上谷良行，中村聖，稲垣由子，和気健三，平海光夫．三歳児健診における遠城寺乳幼児分析的発達検査法の有用性の検討．小児保健研究　1997；56：507-512.
4) 上野一彦，牟田悦子．学習障害児の教育．日本文化科学社．東京．1992.
5) 船津守久．自閉症への学校教育と処遇．自閉症の医療・教育・福祉（佐藤望編著）．日本文化科学社．東京．1993.
6) 金子健．これからの統合教育．発達の遅れと教育　1997；475：76-79.
7) 原仁，篁倫子，三石知佐子，山口規容子．就学前に学習障害を予測する発達指標．小児の精神と神経　1993；33：133-142.
8) 横浜市教育委員会．横浜市子ども基本調査報告書　1996.